

# 同窓生シリーズ④

S62.11.30



池辺晋一郎氏 (S38年卒)

六十年安保  
 闘争の時代、  
 「ニューウェ  
 ーウ」の時代  
 日比谷、戸山  
 新宿と都立高校が、東大  
 への進学率を競い合い、  
 芸術に運動にと燃えた時  
 代。池辺氏の語る高校生  
 活は、かつての青春ドラ  
 マを見るようでした。

「その当時の新宿高校  
 のことを。」  
 当時、名物校長と謳わ  
 れた沢登先生の時代で、  
 お話しはいつも、先生が  
 いかに遊び、いかに落第  
 したかという事で、我々  
 にスケールの大きな生き  
 方を伝えたかったのだし  
 よう。僕は、真面目な  
 戸山高校に対し、青白く  
 勉強ばかりはしないと自  
 負し、授業を抜け出して  
 映画を観に行ったり、新  
 宿御苑にもぐり込んだり  
 するのが、より文化的だ  
 と思っていました。園遊  
 会の最中に御苑にもぐり  
 込んだ者があり、学校に  
 苦情がきた時、翌日の朝  
 礼で「今後、特別な日で  
 なく普通の日にするよう  
 に気をつけよ。」とだけ言  
 われ、大人として扱って  
 くれていたと思えました。  
 僕達も新宿高校生の誇り  
 がありました。

「音楽をめざされたの  
 は、  
 物心ついた時に、まず  
 思ったのが作曲家になり  
 たいということでした。  
 ピアノは小さい時から弾  
 いていましたが、何かを  
 作りたいと思っていたよ  
 うです。北沢中学の時プ  
 ラスバンドをやり、新宿  
 でも音楽がやりたくて友  
 達と管弦楽部を作りました。  
 集まってくれたのが  
 やつと十人で、ウクレレ  
 やマンドリンの人もおり  
 演奏できる曲がないので、  
 ピアノ曲から僕が編曲し  
 て練習しておりました。  
 高三の時には、部員も二  
 十人位になり、僕の作曲  
 したピアノ協奏曲「京都」  
 を演奏しました。」

「受験校の新宿で、勉  
 強と音楽の両立は、大変  
 だったのでは、  
 勉強はかなりハードで、  
 数学は高二で高三の分野  
 まで終らせていました。  
 授業が終ると管弦楽部  
 の練習、音楽部で合唱  
 の伴奏と次に野球、家  
 に帰って予習と復習、家  
 作曲の勉強と慢性睡眠  
 不足でした。独学でウェ  
 ーターベンのピアノソナ  
 タを弾いたり、「冬の旅」  
 を原語で歌ったりする音  
 楽好きな友達が多く、色  
 々な事情で音楽に進めな  
 い彼らに対して、僕が音  
 大に進むのが申し訳なく  
 て、あいつもよくやって  
 いると認めてもらいたか  
 ったですね。音楽につい  
 て質問されると、知らない  
 と言えず、徹夜で交響  
 曲の楽譜を勉強したり、  
 藤村や白秋の詩を一冊全  
 部作曲したりしました。  
 おかげで高二の春に作曲  
 を習いに専門家の先生の  
 家に行った時は、作品を  
 風呂敷包み二つに抱えて  
 行き、驚かれました。  
 池辺氏は作曲家になり  
 たいと訪ねて来る時、人

達に、必ず「音楽以外  
 のあらゆることをやり  
 なさい。」と言うそうで  
 す。創造は批評精神と  
 する池辺氏は、あらゆる  
 方面にそのアンテナ  
 をはっているのではし  
 ゃう。「人間の能力は偏  
 差値だけでは計れない。  
 物事をどれだけ鋭く感  
 じとれるかという感性  
 指数というのもあって  
 よいのでは。」「入試も  
 その人自身がつかない  
 い、その人の中に埋も  
 れている内的な能力、  
 欲求、性質まで計る手  
 段があればいいですね。  
 今日はいから今週の  
 「独眼竜政宗」の作曲  
 です。」と言う先生と素  
 適な奥様、可愛い猫に  
 見送られました。